

FD NAGASAKI JUNSHIN CATHOLIC UNIVERSITY Newsletter

第4号

発行日 2015(平成27)年12月1日

長崎純心大学 教育開発推進・高大連携委員会

〒852-8558 長崎市三ツ山町235 TEL095-846-0084 FAX095-849-1894

目次：

大学・学生と地域の連携	2
グローバル化に対応した教育の模索〔第3報〕	4
地域と大学・大学が地域と連携していく上での課題と今後の方向性 第5回 大学コンソーシアム八王子FD・SDフォーラム報告	5
新たな高大連携プログラム	
平成26年度教職員FD研修会報告	6
2015(平成27)年度SD委員会活動報告	7
コラム ひといき	
平成27年度教育開発推進・高大連携委員会活動報告	8
編集後記	

国際交流の花咲く丘

学部長 荒木 慎一郎

永井隆博士は原爆によって崩壊した浦上天主堂を目の当たりにして、浦上の丘を花咲く丘にして復興しようと決意する。永井千本桜は、花咲く丘を夢見た博士の印税によって、植樹されたものである。花と緑の豊かな浦上の丘をそぞろ歩くと、永井博士が戦後この地で抱いたビジョンが、確かに実現したことを感じる。

この話を持ち出したのは、ひとつのビジョンを描いて、長崎純心大学のみんなで共有したいからである。それは「恵の丘を国際交流の花咲く丘にしよう」というものである。大学のキャンパスのいたるところで、国籍の異なる教員や学生が、様々な言語を用いて語り合い、協力し合い、あるいは競い合っている。そんなビジョンである。

しかし描くだけでは、それこそ絵に描いた餅に過ぎない。永井博士が理想を示すだけでなく、印税を原資にして桜を植えたように、「国際交流の花咲く丘」実現への具体的な歩みを進めて行かなければならない。花を植えるのとはわけが違う。国際交流の主役となる教員や学生が、恵の丘に集わなければならない。それには、大学全体の一致した協力が必要である。多くの人の協力を得て、ビジョン実現のために始まった大学の動きを箇条書きで示しておこう。

- ・ドイツについて……アイヒシュテット・カトリック大学(ドイツ)との国際交流協定の更新。28年度より毎年2名の学生を派遣。マインツ・カトリック大学(ドイツ)からの学生の受け入れ。本学学生の長期・短期の派遣。
- ・スペインについて……アルカラ大学(スペイン)に、28年度より学生の長期・短期の派遣。
- ・韓国について……テグ・カトリック大学への学生派遣枠を8名程度に拡大。テグ・カトリック大学から28年度より学部生1名と大学院生1名を受け入れ可能に。
- ・サマースクールについて……28年度夏、英語を使用する20名の外国人を対象に、2週間のサマースクールを開催。

以上は、現在までの取組のほんの一部である。「国際交流の花咲く恵の丘」に至る道りはまだ遠い。しかし、このビジョンは、本学の建学の理念であるカトリシズムの理念に合致する。カトリシズムは、垣根を設けない普遍性を意味するからだ。



公益財団法人大学基準協会
大学評価適合認証





大学・学生と地域の連携



長崎純心大学医療福祉連携センターにおける学生の活動

奥村 あすか (医療・福祉連携センター助教)

吉田 麻衣 (医療・福祉連携センター助教)

長崎純心大学医療・福祉連携センターでは、長崎大学医学部と連携して将来の医療、福祉・介護人材の養成教育の発展に学術的に寄与することを目的として、様々な調査研究活動を行っています。今回は、地域との連携に関する活動の一つとして平成27年度に実施した「イトコ発見プロジェクト」を紹介します。「イトコ発見プロジェクト」とは8月5日(水)から11日(火)までの7日間、島根県雲南市久野地区で開催された地域診断の手法を使った合宿型のフィールドワークであり、地域の特徴や課題を把握するだけでなく、地域資源や文化的価値なども発見するプロジェクトでした。なお、本プロジェクトは、久野地区の方々をはじめ雲南市、雲南市立病院、NPO法人、東京大学等の協働で実施されており、東京大学の体験活動プログラムとしても位置づけられていました。

本プロジェクトには、東京大学の教員やNPO法人の職員をはじめ、島根大学医学部、聖路加国際大学看護学部の学生等の参加がありました。また、本センターからは助教2人、現代福祉学科3、4年生7人が参加しました。

実際に、現代福祉学科の学生たちは久野地区の人々へのヒアリング、訪問調査法による質問紙調査、地区踏査、エスノグラフィーなどを経験しながら地域のイトコを発見し、コミュニティ・アズ・パートナーモデルの8分野についていわゆるKJ法を参考に分類し、カテゴリー間の関連性を検討し、久野地区の住民の皆様に対して発表を行いました。

プロジェクトに参加した学生からは「地域にどのように入り、社会資源がどの程度あるか、つながりやニーズなど地域を歩き、自分たちで声をかけ、住民さんの口から聞いたことはとても重要な経験になった」「地域に向向いていくことで、住民さんの生活背景が見えたり、コミュニケーションをとっていくことができると思ったので、このようなアウトリーチを大切にしていきたいと思いました」という感想がありました。参加した学生たちは、地域に向向き地域全体を人と環境の相互作用の視点で把握し、アセスメントすることの難しさを感じるとともに、本格的なフィールドワークの手法についても学ぶ機会を得ることができました。

また、プロジェクト参加と合わせて、純心女子学園創立80周年、戦後70周年の節目を迎え、島根県出身である初代学園長シスター江角ヤス先生や永井隆博士のゆかりの地への訪問や、江角先生の親族の皆様との交流の機会を設けていただき、長崎純心大学における医療と福祉の原点を見つめることができました。



「フレッシュマンセミナーⅠ」での取り組み

石田 憲一 (児童保育学科教授)



「フレッシュマンセミナーⅠ」は、初年次教育として1年次全学科の学生を対象とした卒業必修の基礎科目として位置づけられています。これまで「フレッシュマンセミナー」では、創設者の設立理念や本学の歴史・使命、高校から大学での学びへ移行する際の心構え、健康で安全な生活を送る際の心構え等、入学生に対し必要かつ意義があると思われるカリキュラムが練られてきました。また、「ポートフォリオ」の活用により、学生が授業を振り返り、学びが深まるような仕組みづくりが考えられてきました。

「フレッシュマンセミナーⅠ」では、これまでのこうした歩みを生かし、授業に臨みたいと思っています。今年度の科目のねらいを「知恵の道を歩み人と世界に奉仕するという本学建学の精神を十分理解し、自らが生きる地域社会の課題の解決に向けて主体的に取り組もうとする姿勢を涵養する」としました。授業のなかでは、田上富久市長から、「次の時代の長崎へ」とのテーマで、市が取り組む課題と将来を担う学生への期待について語っていただきました。また原爆資料館、出島交流会館、南長崎ダイヤモンド集会所の3か所に分かれてのフィールドワークにも取り組みました。原爆資料館では被爆体験者講話と資料館見学を通じた平和学習に、出島交流会館では出島見学を通じた長崎の歴史、キリスト教世界遺産登録へ向けた歩みの学習に、南ダイヤモンド集会所では市が行う「高齢者ふれあいサロン」の見学を通じた福祉行政の学習にそれぞれ取り組み、その後グループで話し合い、発表を行いました。また、毎回の授業後の学びの振り返りは「ポートフォリオ」に記入し、今年度はそれを基に、各学科の協力を得て、教員と学生との面談を行いました。まだまだ模索の途中ですが、アクティブラーニングの手法を取り入れつつ、より充実した授業となるよう取り組んでいきたいと思っています。

長崎の歴史遺産を体感

滝澤 修身 (比較文化学科教授)

平成27年6月13日(土)、フレッシュマンセミナーの一環とし、出島を見学した。比較文化学科からは、9名の参加者があった。長崎さるくのガイドから、出島成立の理由や、出島の役割などの説明を受けた。来年度は、長崎の教会郡がユネスコの遺産登録に登録される可能性が高い。出島は、17世紀にキリスト教が禁制された後、ポルトガル人を収容する目的で建設されたもので、長崎のキリシタン史とも関連深い。比較文化学科の学生が、実際に長崎のかつてありし日の文化交流の場にも実際触れることができたのは意義深かった。多くの学生たちは、「実際に長崎に因んだ歴史遺産を体感することができて非常に有意義であった。」という感想が述べられた。

「相談援助演習を通じた地域との連携」

飛 永 高 秀 (現代福祉学科准教授)
大 杉 あゆみ (現代福祉学科助教)

現代福祉学科の社会福祉士養成において、基幹科目でもある「相談援助演習」を通じた地域との連携について報告します。相談援助演習はⅠ～Ⅴまで開講しており、特に地域との関係については、地域福祉の理解ということで学外での活動を行っています。

昨年度は、長崎市内の社会福祉法人みのり会と十人町1の組自治会との防災避難訓練を実施し、今年度は大学周辺の地域理解を目的に三ツ山地区の三自治会（犬継・畔別当・六枚板）のご協力を得て、自治会会長様をお招きし、「地域の実情・生活実態」をテーマに講話を頂きました。また、学生は、各班に分かれ、地域実態の把握のためのフィールドワーク（福祉マップ作成、清掃活動）を行いました。さらに関連法人の社会福祉法人純心聖母会の高齢者施設での入居者の方々との交流や清掃活動を行いました。

履修学生からは「意識的に地域を感じることはなかったが、地域で生活することの重要性が理解できた」や「自分が住んでいる地域にも目を向けて行きたい」などの感想があり、学生の成長を垣間見ることができました。私たち教員もこれらの活動を振り返り、教育効果の高い、教育内容、教育プログラムを検討していきたいと考えています。



ときわ荘での清掃

人間心理学科の学生と地域との連携について

岡 嶋 一 郎 (人間心理学科准教授)

人間心理学科は、心理的援助の専門家である「臨床心理士」養成の基礎づくりを、教育研究上の目的のひとつに掲げています。そして、カリキュラムでは、心理検査法、カウンセリング論、臨床心理学、グループアプローチ論、臨床心理演習などの授業からなる「臨床心理系科目群」をひとつの柱に置き、人間の発達、障害、家族関係などの理解や、心理療法をもとにした個人や集団への関わり方についての学修支援を行っています。その学修には地域からの期待も大きく、現在は次の連携の中で、地域の支援ニーズに対して本学科生が貢献するとともに、学生もまた、地域から貴重な学びを得ています。

そのひとつは、諫早市少年センターでの「メンタルフレンド」活動です。ここでは、様々な理由で学校に行けない、行きたくない小・中学生と勉強や遊び等の活動を通してふれあいながら、子どもたちの社会性を高めつつ、学校復帰のための手助けをしています。これには、臨床心理士を目指す大学院生とともに、本学科の4年生10名ほどが関与しています。もうひとつは、長崎県内の障害者団体や放課後等デイサービスの依頼を受けて、療育活動、レクリエーション、遊び、付き添いなどの支援をしています。これも、大学院生とともに本学科の2～4年生15名ほどが関与しています。

臨床心理士の専門業務には、個人の支援のほかに、地域住民や学校・職場に所属する人々（コミュニティ）全体の心の健康や被害への支援があり、その基礎づくりには、自ら地域に向き、地域の課題や資源（リソース）に接する経験が必要と考えます。そこで本学科は、平成27年度の「フレッシュマン・セミナーⅠ」（全学基礎科目）の一部において、長崎市内の自治会が主催する「高齢者ふれあいサロン」を訪問し、健康寿命延伸のための地域づくりについて勉強する機会を設けました。本学科1年生4名のみの参加でしたが、意味のある体験ができました。

大学生と小学生、一緒に高める英語コミュニケーション力 —英語情報学科の地域連携事業10周年—

鈴木 千鶴子 (英語情報学科教授)

小中高等学校学習指導要領の2016年度の全面的改訂へ向けて、2013年末には既にその基本方針として、小学校の高学年で英語を正式教科にすること、ならびに小学校3、4年生から外国語活動を必修化する計画が発表されています。

10年ほど前、「小学校で英語を教える」ということが話題になり始めたころ、その意義は理解しつつも具体的に「何をどう教えるべきか」について、英語の教職課程を設置している本学も、地域の小学校とともに経験のないことで、それぞれ自分たちだけでは解決し難いとの認識を共有し、連携協力して取り組むことになりました。

本学の「英語科教育法」の科目では、中学・高等学校の授業で英語コミュニケーション力を高め、最終的に英語が自由に使える人材の基礎づくりをどのようにすべきかを、徹底的に学んでいます。その目標を追求していくと、中学校教育の前には是非とも身に着けておきたい素養と姿勢が明らかになってきます。しかもより年少の時期の方がそれらの習得には適していることも判ってきます。しかし、実際の小学生の行動、感じ方や反応、発達の特性など、特に外国語に対する時の状態は、想像の域を出ません。そこで、最も身近な長崎市立川平小学校の英語活動の授業へ、英語の教員免許取得を目指す本学学生が教員とともに定期的に参加するようになり、今年は丁度十年目を迎えました。

その地域連携事業の中心的活動となっている英語コミュニケーション実践は、結果的に大学生と小学生が一生懸命英語で意思疎通を図る活動の積み重ねとなっています。このように大学生と小学生と一緒に英語コミュニケーション力を高める営みが、地域全体のグローバル・コミュニケーション力の向上に繋がることを目指して、今後も力を注いでいく所存です。

児童保育学科の《地域とつながる》2つの特色ある活動 —(チーム・プロジェクト)と〈エキシビション〉—

坂 本 雅 彦 (児童保育学科教授)

学生の実習等の面で地元・長崎の保育・教育関係諸施設と緊密に連携し、地域の中で次世代の保育・教育を担う人たちを養成してきた児童保育学科では、教職員も学生たちも自分たちの教育や研究が《地域とつながっている》という意識を強く抱いており、特に「子ども」を介して地域の人々と交流する機会が豊富にあることが、本学科の特徴の一つとなっています。ここでは、実習以外で、そのような特徴をよく表す活動を2つ紹介します。

一つは、2年次生必修の「ソフォモア・セミナー」という通年の体験学習型授業の一環として毎年実施されている、「チーム・プロジェクト」と呼ばれる活動です。学生が7、8人程度で一つのチームを作り、6月から12月にかけて、長崎市内の特定の事業所（児童福祉施設、子育て支援センターその他）を訪問。学生たちは、そこで企画される子ども関連の行事等への協力といったかたちで地域に貢献し、多様な人々とコミュニケーションを図りながら、社会の中で自己の責任を果たすことを知ることになります。

もう一つは、4年次生の企画・運営による「エキシビション」という、毎年恒例の実技発表会です。公共のホールを借り切り、ミュージカルや合唱・合奏、科学の実験ショーなど、子どもたちの大喜びする舞台をつくり上げます。学生たちは実施の一年前より、教員のサポートを得ながらも自分たちで役割分担を決め、演目ごとに練習や製作を重ね、広報案内のため地域に働きかけ、特に、いつも実習でお世話になる幼稚園や保育園へは直接足を運んでプログラムの説明等を行います。その結果、年々来場者数が増え、今年6月に「とぎつカーナリーホール」で行われた第10回エキシビションでは、770席が満席となりました。こうした《地域とつながる》諸活動を、今後も工夫し充実させていく予定です。

第3報

グローバル化に対応した教育の模索

滝澤 修身 (比較文化学科教授)

長崎純心大学は、積極的に海外の大学との大学協定を結び、交流を深めている。その状況を簡潔に説明させていただきたいと思う。

【ドイツのアイヒシュテット・カトリック大学との学術協定】

ドイツのアイヒシュテット・カトリック大学とは、1994（平成6）年の開学時に学術協定を締結した。それ以来3期に分かれて交流が行われてきた。

第1期は、比較文化学科の学生のためのサマースクールがアイヒシュテット大学で開催された時期である。これは1999（平成11）年まで継続され、ドイツの教会や都市に関する講義が英語やドイツ語で行われた。2000（平成12）年から10年間は両大学の交流が休止していた時期であり、目立った活動は行われなかった。

第2期は、2010（平成22）年に荒木慎一郎学部長がアイヒシュテット・カトリック大学を訪問し、それが契機となって同大学のクラウディア・シュールタイス教授と本学の鈴木千鶴子教授との共同プロジェクトが開始された。本学の英語情報学科と児童保育学科の学生とドイツ、スペイン、アメリカ、ポーランドなどの学生が、共同で小学校教育に関するテーマをオンラインで考察し、探求する国際プロジェクトであった。これに伴い、両大学の教員の相互訪問や研究会への参加が毎年実施されている。

第3期は、2015（平成27）年8月3日に新たに調印された協力協定により始まった。この協定はこれまで以上に細かく両大学の協力について規定している。とくに学生の交換留学枠を毎年2名と規定したことは画期的である。これまで2名の学生がアイヒシュテットに留学しているが、今後は毎年2名を送ることができる。鈴木教授とシュールタイス教授の「線の交流」に、交換留学が加わり、いずれは他のプロジェクトを加えて「面の交流」となっていくであろう。

【マインツ・カトリック大学社会福祉学部との協定】

2015（平成27）年、ドイツのマインツ・カトリック大学からウルリッヒ・パーペンコルト社会福祉学部長を迎えて、新たな交流協定の締結に向けて一歩が踏み出された。交流協定の締結が行われれば、本学の現代福祉学科の学生と、マインツの社会福祉学部の学生とが、交換留学をすることになるであろう。今年長崎ではドイツとの交流150周年を記念した展覧会が開催され、長崎日独協会が新たな体制で活動を活性化しようとしている。私たちは長崎にあるカトリック大学として、建学以来培ってきたドイツとのカトリック大学交流を広げ、深化させる絶好の時期を迎えているのである。

【スペイン・アルカラ大学言語学センターとの協定】

スペインのアルカラ大学とは昨年、言語学センター《アルカ・リングア》との大学協定が結ばれた。この協定は、本学の学生が主に、スペイン語を始めとする言語学習プログラムによって学べることを明確にしたものである。本協定をもって、アルカラ大学のスペイン語コースや他の言語コース（フランス語、イタリア語、ポルトガル語等）の単位を修得することが可能となった。今年度この協定の内容はさらに拡大され、アルカラ大学と本学とがより広範な大学提携し姉妹校となった。このことにより、大学間の共同プロジェクト、教員の交換、アルカラ大学学部の英語クラスへの参加などが可能となった。現在、本学の教務委員会を中心に、アルカラ大学で取得した単位を本学の単位として認定することが討議されている。



【韓国の大邱（テグ）カトリック大学との交流締結】

韓国の大邱（テグ）カトリック大学とは、現代福祉学科を中心に交流が進められてきた。2013（平成25）年9月26日から28日にかけて、現代福祉学科長と現代福祉学科の教員1名、事務職員1名が、交流締結に向けての事前協議のため大邱カトリック大学校を訪問し、留学に関する Semester 制度について検討された。

2012（平成24）年度には、現代福祉学科の学生と大邱カトリック大学社会福祉学科の学生との国際交流に加え、韓国における福祉の状況を学ぶことを目的として、現代福祉学科の教員2名が引率し、現代福祉学科の2年生5名が大邱カトリック大学を訪問。高齢者施設、障害者施設、児童福祉施設などを見学訪問し、社会福祉学科との国際交流が行われた。

2014（平成26）年度から、大邱カトリック大学グローバルビジネス学部 学部長玉学部長が客員教授として本学の集中講義で来学された。交換留学等の今後の大学交流が検討され、本学の現代福祉学科は、数日間の短期留学の申請を行った。

【その他の学生交流】

最後に学生の交流について例年通り2015（平成27）年7月上旬、メキシコの《リセオ・ハボネス》の生徒2名が、日本の学校生活を経験するために来日した。本学のスペイン語クラブの学生と交流を行い、純心女子高等学校へも訪問した。メキシコの《リセオ・ハボネス》の生徒の滞在期間中、本学「日本語教員養成課程」の3年生と4年生がホストファミリーを引き受けてくださるなど全面的にサポートしてくれた。

このように長崎純心大学では、グローバル化に対応した教育が模索されている。今後は、上記の大学との関係が益々深まってゆくであろう。長崎純心大学の学生が、海外の大学で学び、国際感覚を身に付け、世界に羽ばたいて活躍することを願って止まない。

地域と大学・大学が地域と連携していく上での課題と今後の方向性

第5回 大学コンソーシアム八王子 FD・SD フォーラム報告

畠山 均 (英語情報学科長)

大学コンソーシアム八王子が主催するFD・SDフォーラム(2015年8月28～29日、八王子市学園都市センター)に出席した。今回のフォーラムは「大学改革を支える新しいFD・SD - ガバナンス改革を教職員成長のトリガーに」をメインテーマに、一日目は2つの講演、2日目は5つの分科会に分かれ、新たなFD・SDの可能性について議論した。ここでは私が出席した分科会「地域と大学・地域に貢献する連携について本音で語る」の内容を報告する。

現在、大学の地域連携の必要性が頻繁に語られているが、地域と大学を取り巻く様々な主体にとっての望ましい連携の姿は明確になっていない。この分科会では文部科学省「地(知)の拠点整備事業」に採択された杏林大学とその協力自治体との連携について、まず各主体が現状報告をし、その後参加者で議論し、大学と地域が連携していく上での課題と今後のあるべき方向性について考えた。

最初に杏林大学がこれまで実施してきた学生中心の地域貢献活動(高齢化した地域を活性化するため若者フォーラム、地域住民の健康増進・介護予防事業、発達障がい児の余暇活動支援)が参加した学生により報告された。その後、それらの活動について地域住民の立場から、地域に立地する企業の立場から、さらに行政担当者の立場から、それぞれの取り組みに対する感想、評価、改善点などが報告された。次にその発表を受けて、参加者は4～5名のグループに分かれ、それぞれの大学での地域貢献活動を踏まえ、大学と地域の連携についての現状と課題を議論した。

以上を通して大学と地域の連携についての課題と今後の方向性についてまとめると次の6点が重要と考える。

(1) 不明確な大学側の責任主体

多くの大学ではこの地域貢献活動を取りまとめ、活動をコーディネートする部署(組織)が明確でない、または存在しない。従って各部署や学部、学科が個別に活動はしているが、全体を統括する部署が不明確なために予算の重複、スケジュール調整上のバッティングなどが起こっており、効率的な運営を難しくしている。

(2) 学内関係者の希薄な協力意識、それに伴う学内の連携・協力の難しさ

地域貢献活動についての学部間、学科間、さらには教員間での温度差がかなりあること。これは杏林大学においても顕著で、

「大学全体として」の活動と言っても一部の学部・学科、または熱心な教員の献身的な働きに負っている部分が多く、学部学科横断的活動の実施を難しくしている。

(3) 学生指導のむずかしさ、学生間の熱意、積極性の差

学生間にも地域貢献活動について熱意、積極性の差は存在し、一部の熱心な学生に過度の負担を強いている側面は否定できない。熱意のない学生を半強制的に参加させても活動自体がうまく行かない。活動への参加は基本的にボランティアであり、謝礼はもちろん交通費支給もない場合が多い。また授業中での活動ではないので単位認定もない。

(4) 効果測定のみずかしさ

個々の地域貢献活動の問題点を検証し、改善点を考え、活動の効果の有無について継続的に分析していく事が重要であるが、どのように効果を測定するかについてはほとんどの大学が今後の課題という段階である。特に行政との共同事業の場合、1～2年で効果がないと判断された場合、その後の予算化は不可能である。

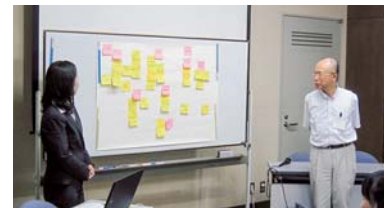
(5) 市民および行政の大学への過度の期待

学生に対する地域貢献活動の教育的意義を無視し、単に学生を安価な労働力としてしか見ない傾向が市民にも行政にも存在する。

(6) 目的の明確化と当事者間での目的の共有

地域貢献活動をなぜするのか、その目的が不明確なままに多くの活動や事業が実施され、その一部は継続されるがその多くは継続せず途中で中止される。

現在、文部科学省の補助金との関係で大学の地域貢献が流行のようになっているが、大学として「なぜ」地域貢献活動をするのか、その目的と方針を明確にし、その上でしっかりと実施体制を作らないと「労多くして成果なし」という結果になってしまうだろう。以上がフォーラム終了後の一番の感想である。



第5回 大学コンソーシアム八王子FD・SDフォーラム分科会の様子

新たな高大連携プログラム

教育開発推進・高大連携委員会 委員長 足立 耕平

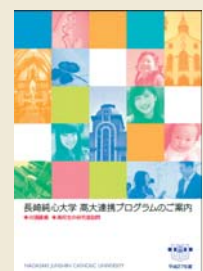
(人間心理学科准教授)

本学ではこれまで高校生を対象とした様々な事業を行ってきました。本年度より、これらをさらに発展させ社会貢献という視点から新たな高大連携プログラムにまとめ直しました。このプログラムは『出張講義』と『高校生の研究室訪問』の2つの内容が含まれています。

『出張講義』では本学の教員が高等学校などを訪問し、大学レベルの学問や多様な研究の一端を紹介する模擬講義を実施します。以下のように本学の5学科それぞれで特色あるテーマを設定しています。比較文化学科：「長崎の世界遺産」・現代福祉学科：「日常生活の中の福祉」・人間心理学科：「高校生のための心理学」・英語情報学科：「コミュニケーション」・児童保育学科：「子どもたちの未来を照らす学びの世界 - 児童保育学への招待 -」。その他、「日本国憲法」や「情報との付き合い方」など教養・基礎系の科目に関しても出張講義を用意しました。教養・基礎系の科目は専門科目を学ぶ上での土台となる重要な科目として位置づけられています。高校で学ぶ教科との関係も比較的強い講義内容と思われます。

『高校生の研究室訪問』は高校生が本学の研究室を訪問し、専門分野の教員から直接話を聞くものです。出張講義の内容よりもさらに専門的な話を聞くことができます。生徒が自身の興味・関心を深める目的で、また高校での課題(小論文など)を行うための取材として活用していただくことを想定しています。

若者を取り巻く環境が変わってきている中で、社会全体で若者を育てるという視点は今後ますます重要になってくると予測されます。本学も社会に開かれた大学として、若者の教育を担う責務を果たしていきたいと考えています。なお、長崎純心大学は「知恵のみちを歩み 人と世界に奉仕する」を教育理念としています。本学の特長資源を活かして積極的に社会貢献を行うことは、まさしくこの教育理念に沿うものです。高大連携プログラムによって若者が自らの視野を広げ、学習意欲を高める機会になれば幸いです。



教職員(FD)研修会報告

—2014(平成26)年度教職員FD研修会概要—

坂本 雅彦
(児童保育学科教授)

本学で毎年3月に実施している恒例のFD研修会では、ここ数年来、主として授業の上での工夫や改善に焦点を合わせたテーマを取り上げてきました。それが教育学的に重要なテーマであることはもちろんです。しかし、2014年度については、直接の授業者たる教員の(個人としての)教育能力の向上という視点をいったん離れ、学生たちにとっての学びの環境である大学それ自体に、学びを支援する態勢がどれだけ備わっているかという大局的な視点から研修会のプランを立て、準備を進めていくことにしました。その方が「教員/職員」という立場の違いを越え、問題意識や改善への意欲を全学で共有しやすいと考えたからです。その結果、2015年3月6日に実現したのが、「特別な事情を有する学生への対応と支援」をテーマに、午前10時から午後3時までのプログラムで行われた教職員研修会でした。

プログラムは、大きく、いわゆる発達障害学生への対応の問題に論点を絞った午前中の部と、その問題を含め、他に「経済苦」を抱えた学生、「人権」を脅かされている学生、顕著な「学力特性」を示す学生も視野に収めた、広義の“特別な事情”を有する

学生への対応と支援について考える午後の部との二部構成としました。



【参加者の声(事後アンケートの自由記述より抜粋)】 (午前中のプログラムについて)

- ・学内で課題となっている、特別な事情、特に発達障害のある学生に対する支援のあり方について理解する機会をいただき、感謝している。今後、講演内容を参考にしながら、学生支援に役立てていきたい。
 - ・障害のある子・人を特別扱いしない、各人の個性を認めると思いながらも、叱らない、優しくするばかりで逆に特別扱いしていた自分に気づきました。貴重な講義をありがとうございました。
 - ・発達障害の理解と関わりについて学ぶことができたことはもとより、日常の人との関わりの中でよりよいコミュニケーションを行っていくために大切なことを学ぶことができた。
 - ・「障害があっても適応していれば問題はない」、「障害とうまくつきあう」、「具体的にしていけないに伝える」など、今後の指針となるような言葉をたくさん聞くことができ、参考になった。
 - ・発達障害の度合いより、適応できているか否かが大切で、適応できていない場合は「指示→遂行→評価(できなければ叱る・できればほめる)」という内容、強く響きました。
 - ・今までに関わったことのある学生の具体的な姿を思い出しながら聞きました。自分の関わり方を見直し、反省もありましたが、ヒントもいただきました。ありがとうございました。
- (午後のプログラムについて)
- ・他の学科や職員の方々の、違った立場からの意見が聞けて、

午前の部では、九州工業大学における学生の支援体制づくりに顕著な功績をお持ちの高橋正泰氏(発達障害支援研究所たまや所長)をゲストに迎え、「多様な個性の認め方～発達障害の理解と関わり～」と題した非常に啓発的な講演をいただくと共に、公開座談会という形式で、本学内のいくつかの部署で相談業務に携わる教職員3名との意見交換を行いました。

午後は、分科会形式で、上述した個別のテーマごとに会場を設定し、話題提供者からの報告と、参加者からの問題提起等に対する助言者のコメントを中心に議論が行われました。特に、人権被害を受けている可能性のある学生への対応をテーマに組織された分科会では、特別に学外からの助言者として、NPO法人DV防止ながさき代表の中田慶子氏に参加していただきました。分科会の終了後、再び教職員一同、大教室に参集して各分科会代表者からの報告や提案を聴き、この日の研修会は終了しました。

実り多い一日でしたが、おそらく本学のどの教職員も、“この日の研修会の終了”をもって“問題そのものの解決”とは捉えていないはず。「障害を理由とする差別の解消の促進に関する法律」(障害者差別解消法)の2017年度施行を目前に控えているということもありますが、どのような学生にも充実した学びが保障される環境(理想の大学)づくりへ向けた小さな努力の積み重ねを、今後も継続していくことが私たちの課題と言えます。

とても良かったです。皆さん色々な経験をされており、とても参考になりました。

- ・具体的事例を交えた有意義な会でした。「情報の共有とシステム化」というのがキーワードになったと感じられました。
- ・配慮が必要な学生に対しての情報共有、システムづくり、対応へのマニュアル作成の必要を感じた。
- ・教職員の連携を強く意識させられる内容でした。1、2年生のうちからいかに学生の状況を把握しておけるか、今後留意していきたいと思います。
- ・学生の現状において様々なバックグラウンドや事情があるかもしれない、という考えを持っておくこと、対応(窓口までの)に関する知識をつけておくことが大切だと学んだ。
- ・日常の学生との会話の中にあるいろいろなヒントがあったのだ、という気づきを持た。今までスルーしてしまっていた何気ない会話も、知識を少し持つだけで「ひっかかり」となり、よりよい支援につなげられるかもしれない。
- ・普段、デリケートでなかなか話し合えないことについて話し合えて、とても良かったです。



2015(平成27)年度 SD 委員会活動報告

SD 委員会委員長 中 尾 剛 (施設課長)

6年目を向かえたSD研修会、2015(平成27)年度第1回SD研修会を8月26日に本学大会議室にて行いました。研修のテーマは、1. 大学教育の質的転換に向けて 2. 学園の中長期計画 3. 学園の経営・財務状況の把握・分析です。今回は、鹿児島純心女子大学から4名、純心中学校・純心女子高等学校から3名の職員の方にも参加していただきました。



「大学教育の質的転換に向けて」では、何故このような経緯にいたったのか、説明後、パネルディスカッション形式で、各課長、室長、鹿児島純心女子大学の方を交え、大学が求められているいくつかのテーマをあげ、今の現状、それを現実にするには何が必要か、どういったことを改善しなければならないかなど、大変有意義な意見を多数聞くことが出来ました。また、鹿児島純心女子大学の現状を聞くことができ、他大学ではどのように取組んでいるのか、参考になる意見も多々ありました。

「学園の中長期計画」「学園の経営・財務状況の把握・分析」というテーマでは、本学の谷川事務局長が講演し、今後、ひとりひとりがどのように取組んでいくべきか、何をしなければならないかを改めて考えるよい機会になりました。自分たちが勤めている大学が、今、どのような状況なのか、初めて知る職員もいたのではないのでしょうか。



今年の研修会では、現在の長崎純心大学がどのような状況で、何が課題なのか、今後どのような取組が必要となるのかを、より具体的に考える機会が出来たのではないかと考えます。

【参加者の声 (事後アンケートの自由記述より抜粋)】

- ・ パネルディスカッション方式の研修会はパネラーが良く課題を研究していた。
- ・ いろいろな課題、今後の方針について、他の部署や他校の現状や取組みを知ることができた。
- ・ もう少し時間を取って、各項目に対する質問、討論することがあればよかった。
- ・ 財務状況について、現状を知ることができ、常に危機感をもって仕事に取組まなければいけないと、再確認した。
- ・ 財務状況について詳細に説明を受けたことによって、経費への経営的な感覚を持つことへの十分な理解に繋がった。

ひといき



コラム

ボランティア：地域の子どもたちとの交流

米 倉 幸 生 (現代福祉学科准教授)



「知恵のみちを歩み 人と世界に奉仕する」この学園標語にもあるように、長崎純心大学にはボランティア系のサークルが数多く存在している。県内各地の施設やイベントにお邪魔して、あるいは県内各地から子どもたちを招いて交流を深めているが、これは学生の活動に限った事ではなく、教員もまた様々な形で子どもたちと交流している。事例を2つほど紹介する。

某施設で、入所している子どもたちの携帯電話の所持と使用を制限する規則を定めた。早速ある子どもから「そのグループ(SNS)内では通じない言葉があるんだけど、それはすぐ消されるから、自由に通信できなければ私仲間はずれになる。」と言われたとのこと。予想しなかった問題だ。しかし、「みんなスマホ(携帯)は『他の人ともっと近づくためにある』って言ったけど、誰が仲間はずれになるかを決める道具になっているのはおかしくないかな?」と問いかけたときは、子どもたちは黙ってこちらを見ていた…。さらに他の折に同施設で、「友達ってなんだろう。」と聞いてみる。A君：「自分の味方になってくれる人。」Bさん：「いつもそばに居てくれる人。」そこである童話を紹介する。わざと乱暴な振る舞いをしてそれを止めた友人が村人に受け入れられるよう一芝居うって人知れず立ち去った鬼の話を。聞き終わったそのふたりから面談を申し込まれる。「とても青鬼のまねは出来ない。」「私たちに本当のトモダチできるかな?」と涙ぐみながら尋ねられた。

このように、子どもたちはいつも大人が気づかない何かを教えてくれ、その真っ直ぐな心は深い感動を与えてくれる。

教育開発推進・高大連携委員会活動報告

教育開発推進・高大連携関連委員会

第1回 平成27年4月8日 第2回 平成27年5月20日
 第3回 平成27年6月10日 第4回 平成27年7月15日
 第5回 平成27年9月16日 第6回 平成27年10月14日
 第7回 平成27年11月4日

教育開発推進関連

■学生による授業アンケート

前期 平成27年7月6日～7月29日

- * 質問項目の改定
- * 教員へフィードバックアンケート実施
- * 集計結果の公開（ホームページ）

■教員相互による授業参観

平成27年11月7日～11月18日

- * 教員へフィードバックアンケート実施

■出張等

大学教育学会第37回大会「ところで学生は本当に育っているのだろうか」

第5回大学コンソーシアム八王子FD・SDフォーラム「大学改革を支える新しいFD・SD」

■教職員FD研修会

平成27年3月6日 10:00～15:00

- * 教職員へフィードバックアンケート実施

高大連携関連

■出張講義

※純心女子高等学校2年生対象（3クラス）

平成27年4月15日～7月15日毎週水曜日1時間目

※長崎県立佐世保西高等学校

平成27年7月30日・31日・8月4日・5日・6日・7日

※長崎県立清峰高等学校

平成27年9月13日

※長崎県立長崎北陽台高等学校

平成27年10月26日

※長崎県立島原高等学校

平成27年10月30日

■高大連携企画「大学へ行ってみよう」

純心女子高等学校1年生対象 21名

平成27年10月13日（10:00～13:10）

■英語情報学科の授業見学

純心女子高等学校2年生英語コース 34名

平成27年10月22日（12:00～15:20）

■純心女子高等学校教員と純心大学教員の打ち合わせ

図書・雑誌案内

※これらの本は、教育開発推進室で閲覧できます。貸出しを希望される方は、図書館で手続を行ってください。

■定期購読雑誌等

- * 「高等教育研究」
日本高等教育学会編 玉川大学出版部発行
- * 「IDE 現代の高等教育」 IDE 大学協会発行
- * 「INTERNATIONAL REVIEW OF EDUCATION」
UNESCO INSTITUTE FOR LIFELONG LEARNING

■図書

- * 学生支援に求められる条件
- * 大学のIR Q&A
- * 大学教育の変貌を考える
- * 大学教員のためのルーブリック評価入門
- * アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換
- * 発達障害大学生支援への挑戦

他

編集後記

多くの皆様のご協力のもと、無事にFD Newsletter 第4号を発刊できましたことを御礼申し上げます。

本号では「大学・学生と地域の連携」という特集を組みました。教育開発という視点から考えますと、地域と連携して教育を行うことの効果は非常に大きいといえます。記事を読みますと、地域社会との関連の中で学生が多くの貴重な体験をし、考えを深めていることがわかります。一方で、各学科、各教員が行っている地域連携について記事を通して初めて知ることも多くありました。今後は大学で行っている地域との連携に関する情報を集約し、効果的な取り組み方や問題点を共有できるようなしくみが必要であると感じます。今号の記事を通して地域連携の在り方について再考するきっかけになれば幸いです。

平成27年度 教育開発推進・高大連携委員会

足立耕平（委員長） 鈴木千鶴子 濱田洋子 坂本雅彦 米倉幸生 滝澤修身 細田美恵

長崎純心大学 教育開発推進・高大連携委員会

〒852-8558 長崎市三ツ山町235 TEL095-846-0084 FAX095-849-1894 URL <http://www.n-junshin.ac.jp/univ/>